

『JAPAN REVIEW』 NO. 5 (1994年刊) 掲載論文

荻生徂徠の市民社会（政談）

オロフ・リディン

要旨：荻生徂徠（1666-1728）は、60歳位のときに、彼の傑作—政談 “Political Discussions” —を書き、この中で、徳川社会に対する彼の意見を示し、社会をより良くするための、多くの改革を提案した。経済学 “Political Economy” において、これは享保時代（1716-36）の重要な書物であった。

徂徠は、〈政談〉第1巻の最初で、すでに、「総じて国の治と云は、譬へば碁盤の目を盛るが如し。目を盛ざる碁盤にては、何程の上手にても碁は打たれぬ也」と表現している。

彼は、制度“system”を、碁盤という比喻を使ってイメージし、この制度は、徳川社会をうまく整えられた区画に分割するというものである。〈政談〉の第1巻は、この碁盤が基礎となっていて、その基礎の上に、後に続く第2、第3、第4巻が築かれている。徂徠の考え方は、新しく正しい秩序のある、新しい封建制度であった。しかし、再建がなされる前に、碁盤は描かれ枠組されなければならなかった。同じく〈政談〉第1巻の中で、「……碁は如何様にも打たるべき也」と言っている。

貧困から、政治的無秩序が引き起こされるという事が、彼が中国と日本の歴史を長い間勉強し、60年間を生きた後の結論だった。富裕が、国家を存続させる一方で、貧困は国家の墮落を意味する。3代の中国では、国の秩序がしっかりしていたので、貧困は現れず、その時代は500年以上続いた。徂徠は、正しい制度があれば、徳川社会も豊かになり、永く存続すると考えている。このような考えをもって、彼はこの傑作を書き、その中で悲しむべき状況を描き、将軍吉宗に、多くの政治的改革と、経済的改革を提案している。

この論文では最後に、徂徠が正しいと考えた碁盤の上の秩序と、同じ頃にヨーロッパで発展した秩序とを比較する。

マクロの草紙 （「開かれた作品」としての『枕草子』）

ツベタナ・クリステヴァ

要旨：この論文は、清少納言の『枕草子』の面白さを追究したものである。その出発点となっているのは、テキストの跋文に出てくる「をかし」と「たはぶれ」の二つのキー・ワードである。「をかし」というのは、清少納言の美学的な価値観を象徴しているとともに、読者をテキストに「招きよせたい」という作者の執筆のストラテジーの意味もはらんでいるように思われる。一方、「たはぶれ」というのは、歌枕や掛詞や縁語などの当時の詩学のカテゴリーを表しながら、時代を超える「あそび」の方法でもあると思える。付け加えると、このあそびが当時の言葉づかいの表面にとどまらず、その意味の深層をつらぬくメタポエティックであるので、意味を生じる言葉のはたらきとして、平安朝の詩学を知らない現代の読者にさえも、それを十分に楽しめる結果をもたらしているのだ。あるいは、「たはぶれ」的に言えば、『枕草子』は、当時の詩学に閉じこもった「真っ暗の草紙」というよりも、普遍性を持つ「マクロ

(macro) の草紙」のように見えてくる。

『枕草子』の以上のような特徴はウンベルト・エーコの「開かれた作品」(opera aperta) の概念を連想させる。つまり、「作者は享受者に完成さるべき作品を提示する」という概念である。しかしながら、西洋の文化と文学を背景に開かれているエーコの内容は、現代文学に集中して、それ以前の作品を取り扱っていない。一方、挙げられた音楽の作品の方が、『枕草子』との共通点を持っているように思われる。

以上のような「パラドックス」が、「表現、ないし表情向きの文化」と「内容、ないしコンセプト向きの文化」との問題に関連していることを論じ、次に「表情向きの文化」としての平安朝文化の特徴に簡単に触れる。それは、エーコの「開かれた作品」の概念を一層開こうとする試みでもある。

次に、『枕草子』を「段」的に読みながら、それらの読者への「開き方」を段階的に取り扱う。つまり、「は」段における「名づける」行為とストーリーを語る名のこと、「もの」段における読者をまきこむような「波の語り」のこと、エッセイ的な段における「見立て」と「ずれ」のあそびのこと、日記的な段の「謎のゲーム」としての構造のこと等である。その視点から、清少納言の歌の問題に触れて、歌も清少納言のディスクールに表れている、詩的言語への行動的な態度の結果であると論じる。

最後には、『枕草子』の分類的な伝本と雑纂的な伝本との対立を取り上げて、それを調和させようとする。つまり、「完成させるべき作品」としての『枕草子』のテキスト自体が異なった伝本の発生を条件とするのであり、また、アーサー・ウェイリーの解釈的な英語訳も、その異なった「読み」のつながりの一つである、と論じる。

鎌倉幕府形成における宗教 東鑑を通して

マーティン・コルカット

要旨：源頼朝は政治の天才としてよく知られているが、精神的宗教的生活はあまり知られていない。この論文で源平合戦と鎌倉幕府の設立を通しての頼朝の宗教的態度に焦点を当ててみたいと思う。頼朝は八幡信仰だけでなく観音、法華経にも信仰が厚かった。鎌倉幕府と町としての鎌倉を作った時、頼朝は精神面を念頭に置いた。鶴岡八幡宮、勝長寿院、永福寺、持仏堂などを建てた動機には政治面と同時に宗教的なものもかなりあったと思われる。頼朝の軍事および政治的活動を把握するためには彼の宗教的関心も捕えなければならない。

粟散辺土から仏国へと変容した日本

ウィリー・ヴァンドゥワラ

小論は、中世日本仏教界に於ける世界観の幾つの特徴を考察することを試みたものである。地上地理観と宇宙地理観とを区別する一方、又他方では双方が密接な関係にあることを論証する。

大陸文化の伝来によって、日本人は二つの異なった文脈^{コンテキスト}と接触したのである。その一つは、中国の世界観、とりわけ中国を中心にした中華的地理観であり、もう一つは、仏典に基づいた宗教的世界観であった。後者は、時空の両次元に於いて最も広大無辺なものであり、綿密な

宇宙論といっても過言ではない。これらの大陸伝来の世界観を背景に日本人は、日本をその広大なコンテクストの中へ位置づけた時、小国という意味合いでしばしば「辺地粟散」又は「粟散辺土」という表現を日本のことにあてはめたのである。更に、辺土という観念は、しばしば末法思想と結び付けられたのである。辺土に、そして末法時代に生まれるという、悪条件の重なった境遇にあっては、解脱への期待も無に等しい。

一方、日本人の自分の住んでいる小国に対する評価も時代と共に変わっていく。日本は小国ながら神仏の加護を受けている国であるとし、その結果、辺地粟散どころか、天竺（印度）と震旦（中国）と並んで仏法三国に列するものと見なされるに至った。

専修念仏をとらえた法然等と八宗の高僧との葛藤は、娑婆と浄土に対する評価の差異を反映しているように思われる。専修念仏者が阿弥陀の浄土への往生へ全ての期待を寄せているのに対して、南都仏教を代表する高僧貞慶は、娑婆又は娑婆に近い世界の価値も認めたのであった。従って、貞慶は、この穢土にその教えを遺して入滅した釈迦、又はその仏舎利に対する信仰が厚かった。更に、弥勒及び観音への帰依も唱道したのである。しかし、念仏をもっとも強烈に否定し、釈迦に対する帰依をもっとも主張したのは、日蓮である。自分を常行菩薩と同一視した日蓮は、日本こそ法華經の真理を広めるべき恵まれた地と見なしたのである。

様々な真理の再考

マヤ・ミルシンスキー

要旨：この論文は、一般に「東洋哲学」と呼ばれる分野と、未知に接近する際の比較方法論の適用に関する批評研究である。

侘・寂や空・図の分析を通して（精神の地図作成として）真理の様々な形態、特に、日本で固有に培われたもの、美としての真理を示そうと試みたものである。合理的議論そのものや、日中の哲学の領域を考慮した概念がそれ自体の不連続性を自覚しつつあるヨーロッパ哲学への貴重な課題として示されている。

寂（日本—中国間の伝統で言うところの ji—寂）の哲学的概念は、中国の新儒教の初期から、寂 (ji) の哲学者周敦頤による太極図の説明まで遡って、侘・寂の美学の包含に関連するものである。空の概念は、全ての場所の超越として紹介されている。

この論文は、現代の哲学者像の考察—身近な状況を熟慮し、現在の世界の哲学の水平線に現れる無数の真理を解釈し、明らかにすることで結末を迎える。

3つのテーマと2、3の観点

—日本近・現代文学史、文化史の書き換えのために—

鈴木貞美

要旨：今日の日本文化史と文学史が直面する主要な三つのテーマについて提言する。これらの三つのテーマは、互いに隣接し、かつ、今日の世界の情勢と密接な関係をもつ。

1. 日本文化についての研究の国際化のためには、20世紀の日本文化について、国際関係の観点、とりわけ、アジア侵略に伴う問題がないがしろにされてきたことを率直に反省し、全面的に再検討することが必要である。

2. 科学技術の飛躍発展が、人々の生活様式を大きく変え、未来への夢を育む一方で、恐れ

と懷疑を生んでいるが、そうした今日の状態とよく似た状況を、日本の1910年代に見いだすことが出来る。1910年ごろから、日本の思想や芸術において、ヨーロッパの思想から影響を受けながら、“生命主義”が横溢した。これを“大正生命主義”と呼ぶ。これを再検討し、その帰趨を追うことが、今日のわれわれの思想状況を歴史的に相対化するために必要である。

19世紀の明治日本人とオスマン・トルコ人の日常生活の西洋文化の物の使い方

セレック・エッセンベル

要旨：19世紀の日本とトルコのエリート層は、日常生活の中で西洋からの輸入文化と固有の文化を結びつけ、折衷的な文化パターンをつくりだしていた。この論文では、西洋における近代的人の誕生を促した「文明化の過程」（ノーバート・エリヤス）を枠組みとして、両国の改革派エリート層の服装、家屋、エチケットなどを比較分析する。

近代化以前に存在していた固有の文化パターンや規範と西洋文化が重ね合わされることにより、両国の「個人」は、西洋とは異なった「文明化の過程」を経験することになる。改革と伝統のせめぎ合いの中でつくりだされた折衷的シンボリズムは、政治的な色彩を強く帯びたものであった。エリートたちは、公的な場において、西洋的な基準からして「文明的」な行動と、伝統的な基準からして「文明的」な行動との緊張の中で自我を維持しなければならなかった。しかし伝統（すなわち私的生活）とは近代（すなわち公的生活）の緊張に対する情的な「やすらぎの場」とする定説は、19世紀のトルコと日本にはあてはまらない。エリートたちがやすらぎを見出した私生活では、西洋文化と固有文化とが公的生活におけるよりももっと複雑にまざりあっていたのである。

初婚過程の規定要因 兄弟姉妹構成の影響を中心に

小島 宏

要旨：本研究は日本における兄弟姉妹数、出生順位、兄弟姉妹それぞれの有無の初婚過程に対する影響を明らかにすることを目的とする。年齢各歳における3種類の行動（見合結婚、恋愛結婚、未婚継続）に対するそれらの影響について12の社会的、人口学的、心理学的な仮説を提示し、検討した。

P. Allison の（多項ロジット・モデルを用いた）継続時間事象史分析を、人口問題研究所による1982年の全国（第8次）出産力調査に基づく18～34歳の未婚者と初婚者の統合データに適用し、初婚のタイミングと配偶者選択法の両者（配偶者選択法別初婚確率）に対する兄弟姉妹構成の影響を同時的に検討した。また、兄弟姉妹構成変数の間、それらと年齢の間、それらと未婚時居住形態の間の交絡効果も同様に検討された。分析の結果によれば、男女両方について「親コントロール仮説」と「知り合い機会仮説」が支持され、女子について「規範的順序仮説」が支持されるようである。また、「世帯混雑仮説」や「子供需要仮説」も部分的に支持されるようである。